

つるの恩返し おんがえ  
(鳥取県) とつとりけん

\*  
とんとんむかし

むかし、あるところに、まことに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

ある冬のこと、おじいさんは、たきぎをかついで町へ売りに出かけました。雪があるからあとからふつて来て、山も田んぼもまつしろでした。歩いていると、田んぼの中で、何かが、ばたばた、ばたばたあはれていきました。おじいさんは、何だろうと思って近付いてみました。すると、一羽のつるがわなにかかって、逃げようともがいていました。おじいさんは、

「ああよしよし。人に見つかつたらえらい目にあう。今、ほどいてやるぞ」といつて、つるをわなから外してやりました。

つるは、空高くまい上がり、うれしそうに「かう、かう」と鳴きながら、おじいさんの頭の上を三回つてから、山のほうへ飛んで行きました。

それから、おじいさんは、町に行つて、

「たきぎはいらんかな。たきぎはいらんかな」と、売つて歩きました。

やがて家に帰つて来ると、おじいさんは、「寒い、寒い」といいながらいろいろに当たつて、おばあさんに、

「きょうは、つるがわなにかかっていたから、放してやつた」と話しました。おばあさんは、

「それはまあ、いいことをしましたねえ」といました。

夕方、だれかがおもての戸をトントントたたいて、

「めんぐださい。めんぐださい」といました。おばあさんが、

「この大雪のふる中にだれだろう」といしながら戸を開けると、きれいな娘が、雪まみれで立っていました。おばあさんは、

「まあ、雪のふるのに、寒からう。早く入りなさい」といつて、娘を中に入れてやりました。娘は、

「人をたずねて町まで行くところですが、雪はふるし、日も暮れてきたので、すみませんが、ひと晩泊めていただけませんか」といました。おじいさんとおばあさんは、

「泊めてやるのはわけないが、うちにはひんぼうで、ふとんもないし、食べる物もろくな物がない」といいました。娘は、

「それでもいいので、どうか泊めてください」とたのみました。そこで、おじいさんとおばあさんは、娘を泊めてやることにして、火に当たらせてやりました。

あくる朝、おじいさんとおばあさんが目を覚ますと、娘はとうくに起きていて、いろいろには火が起<sup>こ</sup>してあるし、そうじもしてあるし、朝<sup>こ</sup>飯<sup>はん</sup>もできていました。

その日も雪がふり続<sup>づ</sup>いて、戸を開けることもできないほど雪が積<sup>つ</sup>っていました。娘はもうひと晩泊めてもらい、家の仕事<sup>しごと</sup>を何もかもしました。そうしているうちに、四、五日がたちました。ある日、娘がいました。

「わたしには、父も母もおりません。一生懸命働<sup>いっしょくめいはたら</sup>きますから、この家の子にしてもらえませんか」

おじいさんとおばあさんは、喜んで、

「わしらは、子どもがなくてさびしかつた。それなら、うちの子になつておくれ」といいました。

ある日のこと、娘がおじいさんに、

「機織<sup>はたお</sup>りをしたいから、町へ行つて糸を買って来てくれませんか」とたのみました。おじいさんが糸を買って来ると、娘はおくの部屋<sup>へや</sup>に行き、機<sup>\*</sup>の周りをびょうぶで囲<sup>まわ</sup>いました。そして、

「これから布<sup>ぬの</sup>を織りますから、どんな事があつても、織つているところを見ないでくださいね」とたのみました。

「ああ、いいとも。どんな事があつても、見ないからな」

ふたりがいうと、娘はびょうぶのむこうに入つて、機織りを始めました。

キイトン バタバタ

バタバタ キイトン

娘は、昼<sup>ひ</sup>ご飯も食べないで織り続け、夕方やつと出て来て休みましたが、つぎの日もまた織り続けました。

三日目の夕方、娘は、びょうぶのむこうから出で来ると、おじいさんとおばあさんにてきあがつた布を見せました。ぴかぴかと白く光つたもようのある美しい布でした。娘は、

「これは綾錦という物です。おじいさん、これを町へ持つて行って売つてください。そして、代わりの糸を買って来てください」といいました。

おじいさんは、町へ布を売りに行きました。

「綾錦はいらんかな。綾錦はいらんかな」といつて歩いていると、お殿さまが通りかかつて、

「綾錦とはめずらしい。見せてみる」といいました。それがたいへん美しいりっぱな布だったので、お殿さまは、たくさんの小判こばんで布を買いました。おじいさんはびっくりして、大喜びで新しい糸を買って帰りました。

つぎの日、娘は、またびょうぶの中に入つて、

キイトン バタバタ

バタバタ キイトントン

と、布を織りました。三日たつと、前よりもっと美しい布ができました。おじいさんが町に持つて行くと、お殿さまが前よりもっとたくさん的小判で布を買つてくれました。

つぎの日、娘は、また、

キイトン バタバタ

バタバタ キイトントン

と、機織りをしました。三日目、おばあさんが、おじいさんに、

「あの子はどうやって、あんなに美しい布を織るのでしようね。織つているところをちょつと見てみましよう」といいました。おじいさんは、

「ダメだよ。どんなことがあつても見ないと約束やくそくしたじやないか」といつて止めました。けれども、おばあさんは、

「気付かれないように、ほんのちょっとだけ」といつて、びょうぶのすきからそつとのぞいてみました。すると、中には娘はいなくて、一羽のつるが、羽ばたきしながら布を織つていました。つるは、自分のわた毛をぬいては、糸のあいだにはさんで布を織つていました。

夕方、娘はびょうぶのむこうから出で来ると、布をおじいさんの前に置いていました。

「わたしは、いつぞや雪のふる日に、おじいさんに助けられたつるです。長いあいだお世話せわになりましたが、ほんとうのすがたを見られたので、もういいにいることはできません」

娘は、そういうて、外に出て両手を広げたかと思うと、つるになつて空にまい上がりました。それから、「かう、かう」と鳴きながら、家の上を三二回つて、山の方へ飛んで行つてしましました。

おじいさんとおばあさんは、またふたりきりになつてしましました。けれども、つるの織つてくれた綾錦のおかげで、一生安樂に暮らしましたとさ。

\* とんとんむかし これから昔話むかしばなしが始まるよという意味いみの決まり文句きもんく。

\* 機 糸を織つてぬにする道具どうぐ。

\* びょうぶ 部屋の中に立てて、風をさえぎつたり仕切りしきをしたりする道具。

\* 綾錦 いろいろの色の糸で織つた美しい布。